

④ 遊びで獲得する知識と授業で獲得する知識との関係に接近することも、その1つの切込み口となろう。ヴィオーは知能を実用的知能と概念的知能に分けて考察しているが、さらにいえば、両者がどのような緊張関係にあるかという視点で検討する必要があると思われる。たとえば、今の子どもは生活感覚や実感など生活実感に欠けているにもかかわらずことばの上ではよくわかる、といわれる。だが、生活実感に欠けているからこそ、ことばの上ではよくわかる、といった方が正しいのではないか。生活実感がことばで定式化された科学的な知識にくみこまれる場合、そこに緊張関係が生じ、それを通して納得したときに科学的知識は力となりうると考えられる。

私の発言に関係して「近くの遊び場を利用しないで遠くの遊び場へ出かけるのはなぜか」の質問があった。「近くの遊び場は平面的であるのに比べて、遠くの遊び場は古墳を利用して立体的であり、それを利用してよく遊ぶことから、遊び場の構造上の違いによると考える」と答えた。

また、回答者の指命がない質問であったが、「1人遊びは遊んでないのか」「遊びの内容を準備して与えることは、正しい指導といえるか」との発言があった。これに対して、「遊びの発達というとき、遊びの人数が多くなることも1つの指標となる。従って、1人遊びも遊びである。問題は1人遊びの段階で足ぶみをし、1人遊びしかできない子どもが多くなってきていることである。この状況は集団で遊ぶ楽しさ、喜びを知らさないでいることを示している。子どもの生活現実がそうであるならば、(集団)遊びを準備し与えて、みんなと遊ぶ楽しさをあじあわせることは正しい指導といえよう。遊びの指導は子どもの生活の実態に即して考

る必要がある」と答えた。

○ 鈴木敏明

○ 単純化して、乱暴ないい方をするなら、子どもが主導権をとっている子どもたちの活動遊び、おとな主導の活動を学習と呼んでもよいであろう。

○ 遊びは、物的環境よりも、相互の人間関係によって影響される方がずっと大である。

○ 子ども主導の活動も、注意深くおとなが組織していく必要がある。しかし、これは、全く活動を管理することと同じではない。

いい遊び、悪い遊びというのは、歴史社会的に決まるものであって、遊びの現象ひとつ、ひとつについて、その都度の理由で決められるものではない。この結果からは、徳目主義しかでてこない。

○ いわゆる遊びをうまく使って学習を進めるということではない。本質的な相互関係が子ども主導の活動とおとな主導の活動の間にある。

○ 実際に、フロアとの話し合いでしゃべったことは、☆印の部分だけである。

以上の提案、まとめから、私たちは遊びと学習(横山氏にならって狭く授業を理解して、との深い連関を踏まえた上での遊びの意義を多少あきらかにできたと考える。また、これを実り多いものにするためには、ただ「自然」をとり戻すというような懐古的な姿勢を乗りこえて、むかしの子どもたちの知らなかった集団の働きを意図的に組織すべきこと。しかし、それができたからといって、それだけで、こんにちの授業のあり方の非人間性を完全に補うものでもないことが分かった。今回のところは、とりあえず、ここまでの収穫で満足すべきではあるまいか。

## 自主シンポジウムⅠ：幼児の言語について

オーガナイザー 村石昭三 (国立国語研究所)

報告者 小村晶子 (京都大学)

「二語文期における幼児の文法の発達」

綿巻 徹 (九州大学)

「二語発話初期のシンタックスの発達」

岩田純一 (国立国語研究所)

「幼児の語彙理解と認識」

高橋 巖 (聖和短期大学)

ディスカッタント 天野 清 (九州大学)

### 趣旨

最近の目ざましい言語発達研究の進歩の中で、日本語という言語体系に依拠したわが国の研究でチョムスキーらの生成文法やピアジェらの認知研究との接点を考えながら、その普遍性、相対性について討論することを期待した。

### 報告

小村晶子(京都大)：二語文期における幼児文法の発達 ——1歳期の格関係についての一考察

〔問題〕 文の意味論, 関係の意味論ともいうべき格文法は子どもの言語発達を明らかにする上で重要な役割を果たす。ここでは1歳期の言語発達の格関係を中心にした分析を行う。

〔観察の手続〕 ○対象児—T児。○方法, 1:3 (1歳3か月) より観察, 1:9までは毎週1回, 以後は2週間に1回, 1回30分~2時間テープ録音。他にメモなど。

〔T児の1歳期の言語発達〕

第I期 (1:3.0~1:4.0) 1語文の時期

第II期 (1:4.1~1:7.1) 2語文の出現

第III期 (1:7.2~1:9.0) 動詞の分化…… $V_1$ =幼児語,  $V_2$ =動詞型〈する〉〈しよう〉,  $V_3$ =動詞型〈した〉〈して〉

第IV期 (1:9.1~2:0.0) 活用, モダリティの芽生え, 存在文の発達。三語文もふえる。

〔格関係の分析結果〕

	II期	III期	IV期	III期	IV期
A 主 格(ガ)	9	16	78	1	4
B 目的格(ヲ)	1	21	58		
C 目標格(ニ)		4	14		1
D 与 格(ニ)			1		
E 位置格(ニ)			2		2
F 道具格(デ)			2		1
G 対称格(ト)			2		1
H 位 置(デ)			1		1

(助詞)

〔仮説的結論〕

1. 助詞を集中的に習得する時期があって, 助詞なしでは使われにくい格はその時期まで出現しない。
2. 最も基本的な格関係は主格, 目的格である。目標格が早くから使用されるのは, その動詞が子どもの生活に深い関わりを持つものであるという個別的な理由による。
3. 主格, 目的格はもっと細分化されるが, 言語発達の中では格関係間のレベルを設定する必要がある。
4. 格の獲得は「格」それ自体の問題だけでなく, 個々の動詞の日常生活での使用頻度や, その動詞のあらわす行為や状態の子どもにとっての認識しやすさといったことも関係してくるのではないか。

綿巻 徹(九州大): 二語発話初期のシンタックスの発達

〔問題〕 幼児の言語発達過程のうち, 非模倣的シンタックスの分析を行う。

〔観察の手続〕 ○対象児—F子。○方法, 生後1:8, 1:10, 2:0の観察記録と発話資料(各月8時間)

〔考察〕

1. この期にあらわれた2語発話の多くは「主語—述語動詞」「対象語—述語動詞」で構成された文であり, その語順は強く固定している。このことは動詞が文末にあらわれなければならないという日本語の基本原則が早期から習得されることを示す。
2. 幼児は規定語—カザラレ名詞の結びつきをつくり出すための語順規則(規定語は必ずカザラレ名詞の前にあらわれるという規則)を習得している。
3. 形容詞は成人の文法では規定語にも述語にもなりうる。しかし幼児では形容詞は1つの単語がこの素性のうちのいずれか1方しか持っていない。
4. 名詞の形態変化(格のくっつき)の発達
5. 主語—対象語で構成される発話が非常に少なく, 英語を話す幼児の場合と対比的である。これは個人差か, 言語体系の差か, さらに検討を必要とする。
6. Brainによる軸文法の枠組を使ってF子の発話を分析する。軸語と認定されるための条件は①頻度が高く, 位置が固定している。②軸語だけの発話はない。③軸語—軸語の結合はない, とされている。この3条件に従って検討すると, 軸文法の適用は困難な点が多い。

岩田純一(国立国語研究所): 幼児の語彙理解と認識——語彙発達と認知発達研究とのかかわり

〔問題〕 上記のテーマについて, 最近の語彙研究の流れについて展望する。

# 1. 語彙研究

従来の研究は語彙差, 名詞・動詞数など量的研究が主流を占めていたが, 最近ではピアジェなどの認知心理学の影響により, 実験的, 質的研究に変わってきた。たとえば保存研究で問題になる, 「多い—少ない」に関するおとなと子どもの意味特徴の違い, 外界の体制化とそれの語彙(関係語など)習得への反映のしかたなど。

語彙研究の一般的シエマは, 非言語的段階で感覚運動的シエマを通して対象を同化調節し, 対象間の関係をとらえる対象認識の発達と, ことばの関係性を扱った「ことばvs対象」と研究と, 今1つは「ことばvsことば」関係をとらえた, 言語系間の研究(連想, 反対語定義, 意味汎化, metaphor analogy …)がある。

2. 認知と語彙に関する研究例, 1) 自己中心的認知とことばの発達, たとえば天野の「やりもらい」動

Kubota made an approach to the subject from a standpoint of pre-school education, Endo from that of primary school education and Yokoyama from his experience of a "movement for making play yards" in which he himself engaged.

Kubota gave a concrete example of play activities led by an idea that they must be based on those things which children are most interested in. In this case the children drew from their activities a burning point for open discussion and build up a kind of hypothesis on the point which they verified afterwards.

Although Suzuki made much of the fact that the play is an activity of "child-initiative type" in contrast to "adult-initiative" learning, he said the mutual influence between these two types of activities should not be disregarded.

Yokoyama lays stress on the tensional relations between conceptual cognition and practical cognition.

To put it shortly, the reason why recent children have their play taken away is that our society today has gone so far from normal as to affect every teaching activities in many of educational systems. Therefore, although it is important to accept the significance of play in childhood in relation with their learning, the defect of teaching activities can not be fulfilled simply by making the play complete.

This conclusion was accepted among the audience.

## Independent Symposium I

### ON THE LANGUAGE OF CHILDREN: THE PSYCHOLINGUISTIC PROBLEMS ON LAN- GUAGE DEVELOPMENT OF CHILDREN

September 11 9:30 am- 12:00 am

R. 10 (421)

Organizer : Shozo Muraishi (National Language Research Institute)

Reporter : Akiko Komura (Kyoto University)

Toru Watamaki (Kyushu University)

Junichi Iwata (National Language Research Institute)

Iwao Takahashi (Seiwa Junior College)

Disputant : Kiyoshi Amano (Kyushu University)

This symposium was taken to discuss on the relativity and universality in language, contrasting the studies of language development with N.A. Chomsky's generative grammar and J. Piaget's cognitive psychology.

A. Komura presented "On the development of grammar in two-word sentences period" and referred to the syntactic case relation of 1 year-old child. Analyzing utterance data on

a child T., she found as follows: (1) The particles (Joshi) were used from 19th month to 21th month concentratically. (2) Most fundamental cases were subjective case and objective case. (3) The acquisition of each case was closely related with usage of verbs. Then, she recommended that semantics was essential to syntactic approach.

T. Watamaki presented "On the development of syntax in the earlier twoword sentence period. Analyzing utterance data on a child F., he found as follows: (1) Most of utterance were "subject+predicative verb", "object+predicative verb". (2) The child has gotten the fundamental rule of word order which sentence was used to accompany a verb in sentence-end in Japanese. Then, he refered that it was difficult to applicate the pivot-open structure theory to acquisition of Japanese.

J.Iwata reviewed the modern vocabulary studies on "The relation of word-understanding and cognition". He commented as follows: (1) The traditional quantitative approach has changed to the qualitative one under the influence of cognitive psychology (J. Piaget etc.). (2) Main topics were on the relation of egocentric cognition and language acquisition (C. Chomsky), the meaning conservation (H. Sinclair), the differentiation of dimensiones in object, (M.P. Maratsos), and the differentiation of spatial & temporal relation (E.V. Clark). (3) What extent to the cognitive structure we can catch depends on the depth of the vocabulary understanding test.

I. Takahashi presented the result of six year's follow up study since the birth of his son, on "The linguistic approach for vocabulary acquisition". According to his result, his son acquired above 9000 words before full six years old. These were rich in number far beyond ones of any other past studies. And he concluded that one of the main factor to make vocabulary richer was the longer recording times. He expended 10 hours every day in recording his son's speech.

After questions and answers on the basis of these presentations, K. Amano commented on (1) the identification of word unit in Japanese, (2) the relativity between meaning and form, (3) the pivot-open structure theory, the relation between language and cognition. Then he recommended the importance of "Lexico-grammatical aspect" to language development study.